長野県更埴市

更埴市倉科地区・八幡地区工業団地
計 画 地 試 掘 調 査 報 告 書

1 9 8 7

更埴市教育委員会
更埴市遺跡調査会

序

更埴市もいよいよ高速交通網時代が訪れようとしております。それに伴う大規模な開発が計画され、ここ数年で大きな変貌を遂げるものと思われます。市民生活の向上を計り、発展ある更埴市をめざす上で、こうした開発は不可欠なものでありますが、先人が残してくれた貴重な文化遺産を後世へ伝えることもまた、現代に生きる私達の責務でもあります。

更埴市は全国的にみても埋蔵文化財の多い地域であり、このたび試掘調査を実施した倉科、八幡の両地域でも埋蔵文化財の包蔵が確認されました。共に今後開発が計画されている地域であり、今回の試掘調査の結果を元に、発掘調査を実施し、詳細な記録を後世へ残せるよう精一杯努力する覚悟であります。

試掘調査に対しまして、御理解、御協力をいただきました地主のみなさま初め関係機関の方々、寒い中作業に従事いただいた作業員のみなさまに心から感謝申し上げると共に、今後の発掘調査への御協力をお願いいたします。

昭和62年３月31日

更埴市教育委員会教育長
更埴市遺跡調査会会長
安藤　敏

目次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　調査の概要……1

Ⅲ　調査日誌……2

Ⅳ　遺跡の環境……3

Ⅴ　層序と出土遺物……4

Ⅵ　まとめ……8

例言

1　本書は、昭和62年１月19日から２月18日の間に実施した倉科、八幡工業団地建設計画地内の試掘調査報告書である。

2　本書の編集は佐藤信之が行い、実測、トレースは出河裕典、田中富子、佐藤が行った。

3　執筆は佐藤が行った。

4　本調査の遺物、実測図、写真はすべて更埴市教育委員会に保管されている。

Ⅰ　調査に至る経過

昭和59年12月、更埴市商工観光課より、倉科地区工業団地計画地内の埋蔵文化財の保護について依頼があり、更埴市教育委員会では、昭和60年１月、計画地内に南棄水遺跡等の遺跡が存在しており、事前に試掘調査を実施する必要があることなどを通知した。その後、計画の見直しが行われる中で昭和61年２月、新たに八幡地区で工業団地の開発が計画された。61年４月、商工観光課より八幡工業団地開発に係る関係事業のスケジュールについて照会があり、市教育委員会では、計画地内に赤坂遺跡、石原Ａ遺跡、柳下遺跡、峯遺跡が存在しており、スケジュールどおり工事に着工するためには今年度中に試掘調査を実施して詳細な分布範囲を確認することが必要であることを通知した。市教育委員会では畑地については夏場、水田については冬場に試掘調査ができるよう６月補正により予算の要求を行ったが、予算の補正は認められず、９月に改めて市商工観光課により倉科地区を含めて補正予算の要求が行われた。市教育委員会では62年の１、２月に調査が実施できるよう準備を進めた。62年１月12日倉科地区市工業団地における試掘調査について、62年１月22日、八幡工業団地における試掘調査について、それぞれ更埴市と更埴市遺跡調査会の間で委託契約を結び、倉科地区は１月19日から、八幡地区は２月２日から調査を開始した。

Ⅱ　調査の概要

１．発掘調査委託者　更埴市（担当　商工観光課）

２．発掘調査受託者　更埴市遺跡調査会

３．発掘調査実施者　更埴市教育委員会　更埴市遺跡調査会

４．発掘調査場所及び土地の所有者
　倉科地区　更埴市大字倉科字北棄水・南棄水　多羅沢久美子他９名
　八幡地区　更埴市大字八幡字石原、前法殿、奥法殿、赤坂、大子、白石峰下、峰、柳下　青木徳雄他37名

５．発掘調査遺跡名
　倉科地区　南棄水（みなみせすらぎ）遺跡（市台帳№152）
　八幡地区　赤坂（あかさか）遺跡（市台帳№86）　石原（いしはら）Ａ遺跡（市台帳№120）
　柳下（やなぎした）遺跡（市台帳№102）　峯（みね）遺跡（市台帳№103）

６．調査の目的　公共事業、工業団地建設予定地内の試掘調査

７．調査の期間
　倉科地区　昭和62年１月19日・20日
　八幡地区　昭和62年２月２日～同年２月18日

８．調査の面積
　倉科地区　工事予定面積8.2*ha*の内25㎡
　八幡地区　工事予定面積42*ha*の内80㎡

９．調査方法　トレンチ調査（１ｍ×２ｍ）

10．調査費用　倉科地区　費用総額　197,000円

信州大学附属図書館教育学部分館

八幡地区　費用総額　520,000円

11．調査会の構成

会　　長	安藤　敏	更埴市教育委員会教育長
理　　事	田沢祐一	更埴市議会
	山崎　衛	更埴市教育委員会教育委員長
	松林光幸	更埴市区長会長
	寺沢政男	更埴市役所総務課長
監　　事	武井隆義	更埴市社会教育委員会委員長
	関　京子	更埴市役所会計課長
幹　　事	武井豊茂	更埴市教育委員会社会教育課長
	山崎文夫	更埴市教育委員会社会教育係長
	矢島宏雄	更埴市教育委員会社会教育主事

12．調査団の構成

団　　長	安藤　敏
調査担当者	佐藤信之　更埴市教育委員会社会教育課
作　業　員	川島吉弘、久保啓子、児玉孝浩、小林芳白、聖沢美次、高野貞子 田尻　勝、塚本　潔、富岡健一、松本秋夫、村山　豊
事　務　局	武井豊茂、山崎文夫、矢島宏雄、佐藤信之、田中啓子、山根洋子

Ⅲ　調査日誌

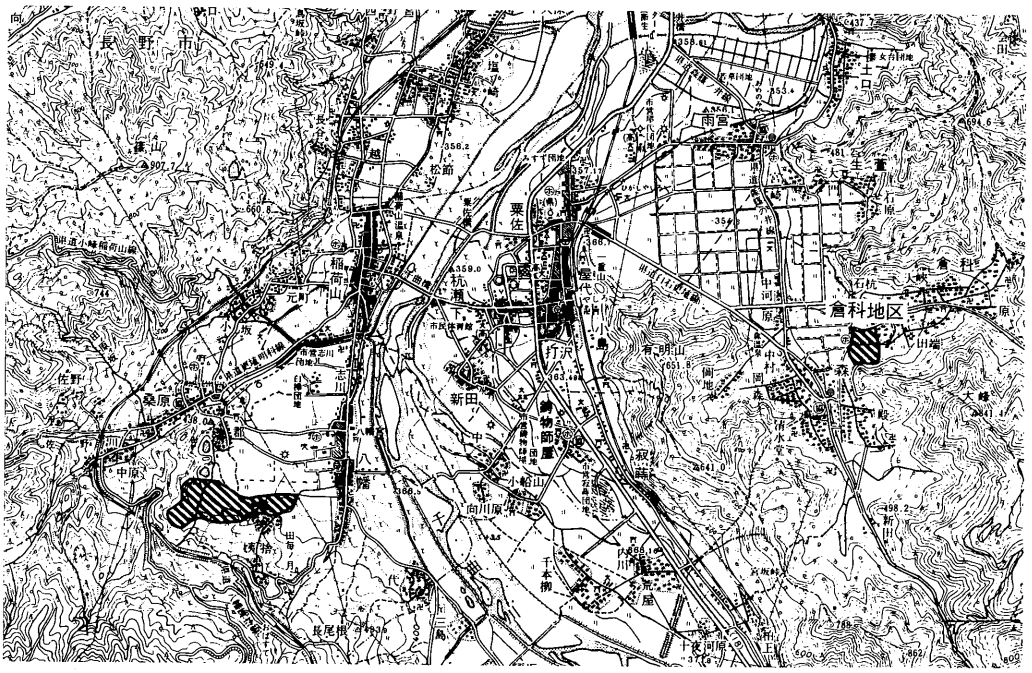
遺跡確認のための試掘調査は、当初積雪前に実施の予定であったが、他の発掘調査との関係で冬場の実施となった。倉科地区については62年１月19日、雪降りの中重機により試掘坑の掘り下げを開始し、翌日終了した。調査前は古墳時代から平安時代の遺跡と考えられていたが出土した遺物は弥生時代のものであった。２月２日、八幡地区の試掘調査を開始した。八幡地区の掘り下げについては、今後の耕作、畦畔等の関係から手掘りで行うこととした。２月３日、20cmを超える降雪があり２日間作業を中止した。日程の関係もあるため５日より作業を再開したが、雪を除去しての作業となり、出水もあって作業は難行した。寒い中での作業となったため、作業員にかぜ等で欠勤する人がふえたため、10日より新たな作業員をお願し、18日に44ヶ所の調査坑を掘り終えた。

１月12日	倉科地区契約
１月14日	調掘調査重機依頼
１月19日	倉科地区試掘開始
１月20日	試掘終了
１月22日	八幡地区契約
２月２日	八幡地区試掘開始
２月３日	雪のため作業中止
２月５日	雪の中作業開始
２月10日	新たな作業員入る
２月18日	現場においての作業終了

Ⅳ　遺跡の環境

倉科地区工業団地計画地は、千曲川右岸にあたる更埴市大字倉科地籍に所在している。北には三滝川、西には沢山川によって形成された扇状地が広がり、両扇状地の接点には、標高365mほどの台地状の地形が作り出されており、南は大峯山より西に延びる尾根を背にするため、計画地はゆるやかな北斜面となっている。北側は三滝川が天井川となるためか湿田地帯となる。南側を画する尾根上には、馬具、鉄鏃を多数出土した県山古墳が存在したことが知られており、計画地の南側では南棄水遺跡が確認され、弥生時代から平安時代の遺物が広く分布している。しかし周辺には発掘調査例がなく、不明確な部分が多い。

八幡地区工業団地計画地は、千曲川左岸の更埴市大字八幡地籍に所在している。佐野川によって形成された扇状地の南端にあたり、その最も低い部分を宮川が流れ、周辺は湿田地帯となっている。扇状地の南限は姨捨洪積台地によって画されており、計画地はこの台地の北側から宮川に経るゆるやかな北斜面及び、宮川によって形成された小扇状地を占めており、標高は375mから450mほどとなる。周辺には昭和60年に発掘調査が実施され、掘立柱建物址群が検出された社宮司遺跡、和鏡が出土している矢筒山経塚、丸山古墳といった遺跡が点在しており、計画地内にも赤坂遺跡、石原Ａ遺跡、柳下遺跡、峯遺跡が確認され、古墳時代から平安時代の遺物が分布しているが、その実体はほとんどつかめていない。



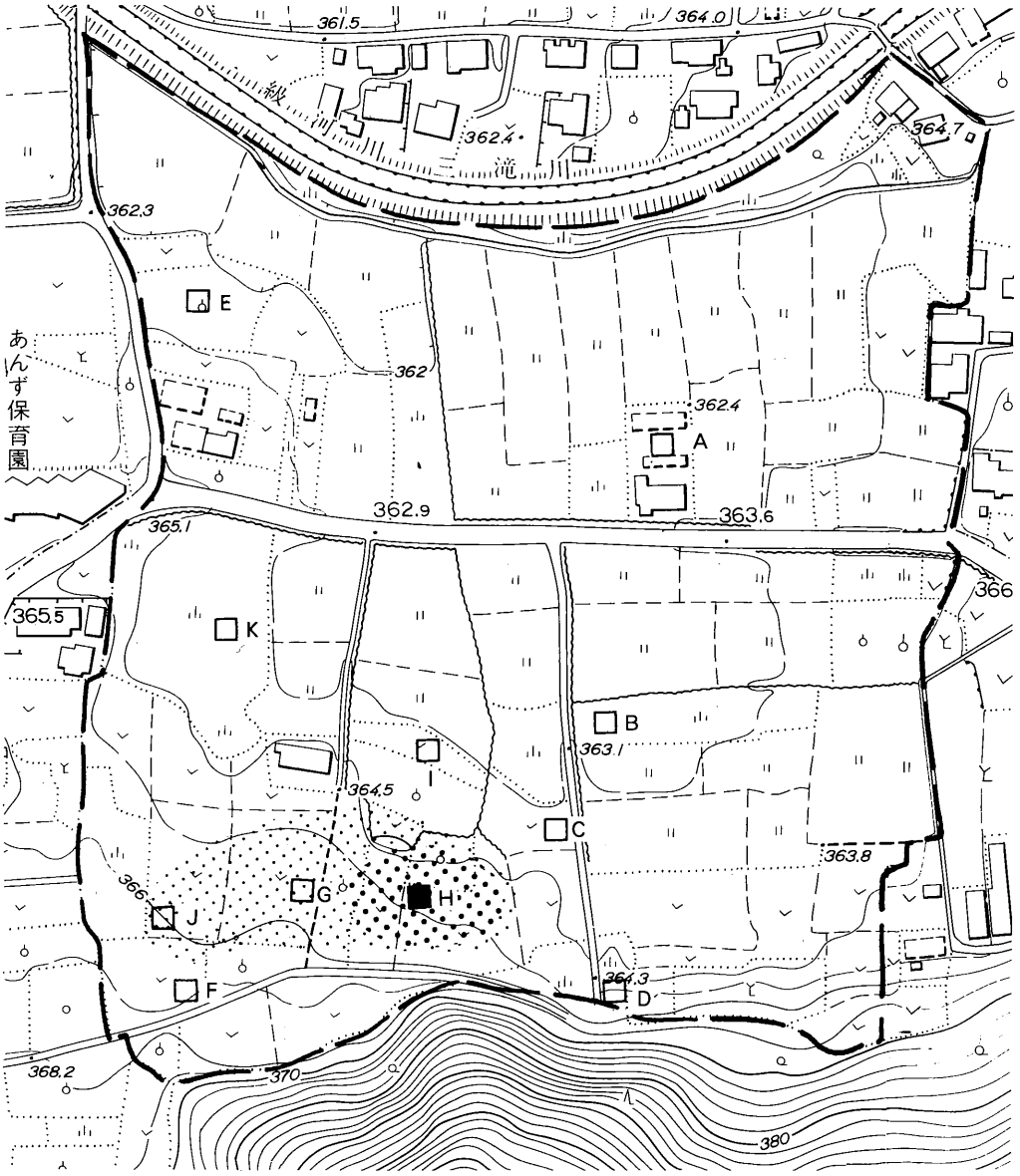
第１図　調査位置図

V　層序と出土遺物

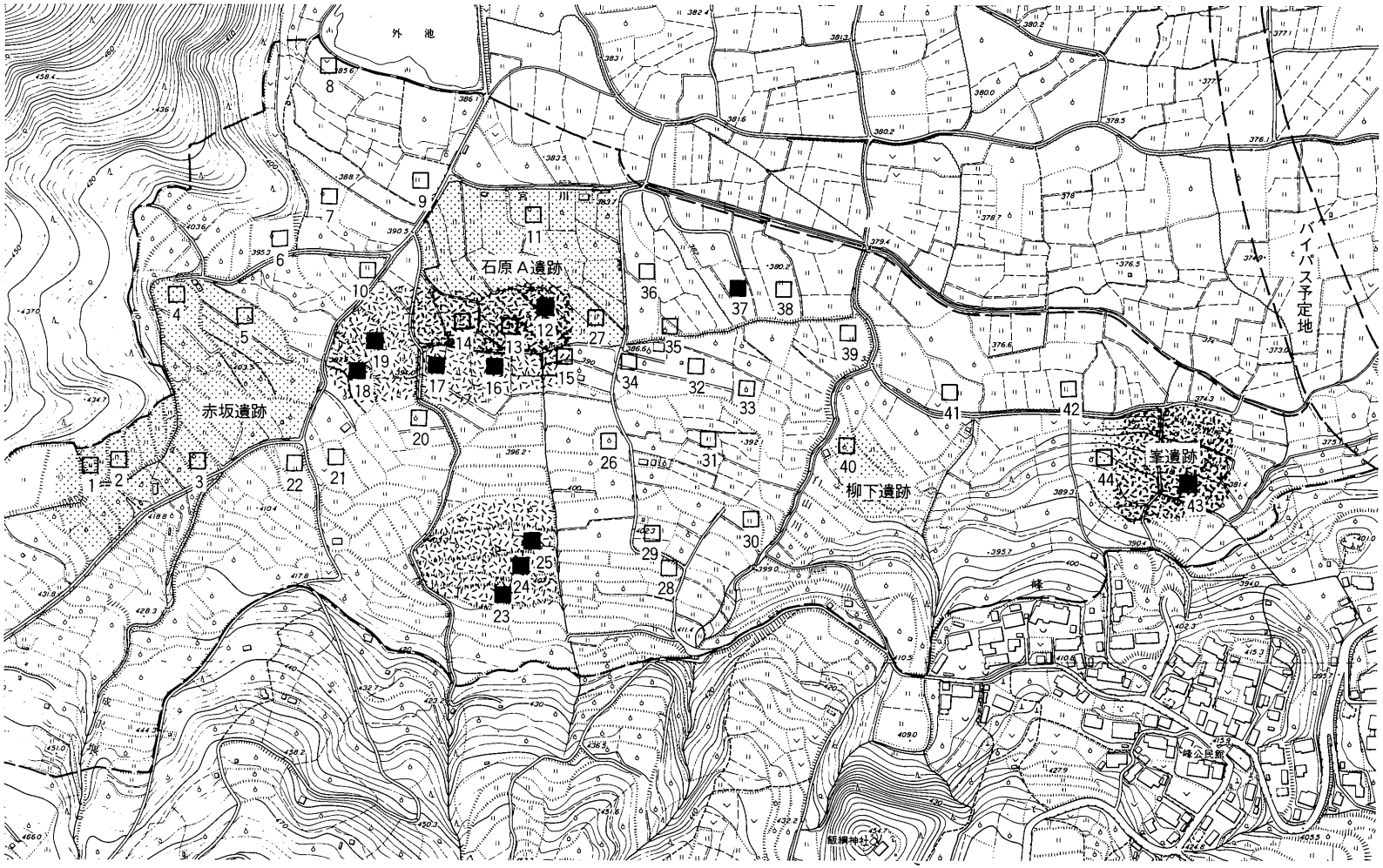
倉科地区

11ケ所の調査坑を設定し、層序、遺構、遺物の有無について調査を行った。

A地点　耕作土下が暗灰色の砂層粘土層となり、多量の礫を含んでいる。礫の存在は調査地点が三滝川の氾濫原であることを物語っており、出水地点が浅く、土が異臭を放つ泥炭層化してい



第2図　倉科地区全体図



遺跡と考えられていた地域　試掘調査により遺跡が確認された地域　(1/5000)

第3図　八幡地区全体図

ることから、湿地帯であったことが想定できる。

Ｂ地点　耕作土下60cmほどは、Ａ地点同様礫を含んだ灰色の土層となっているが、その下は尾根の崩落によって形成したと考えられる山砕の風化土が35cmほどの厚さに堆積しており、さらに下は泥岩層となっている。遺物の出土はない。

Ｅ地点　北側へ舌状に張り出た微高地の先端に設定した調査坑である。耕作土下60cmほどは小礫を僅かに含む褐色の砂層となっており、その下は山砕を含んだ礫層となるため、遺物の出土はない。

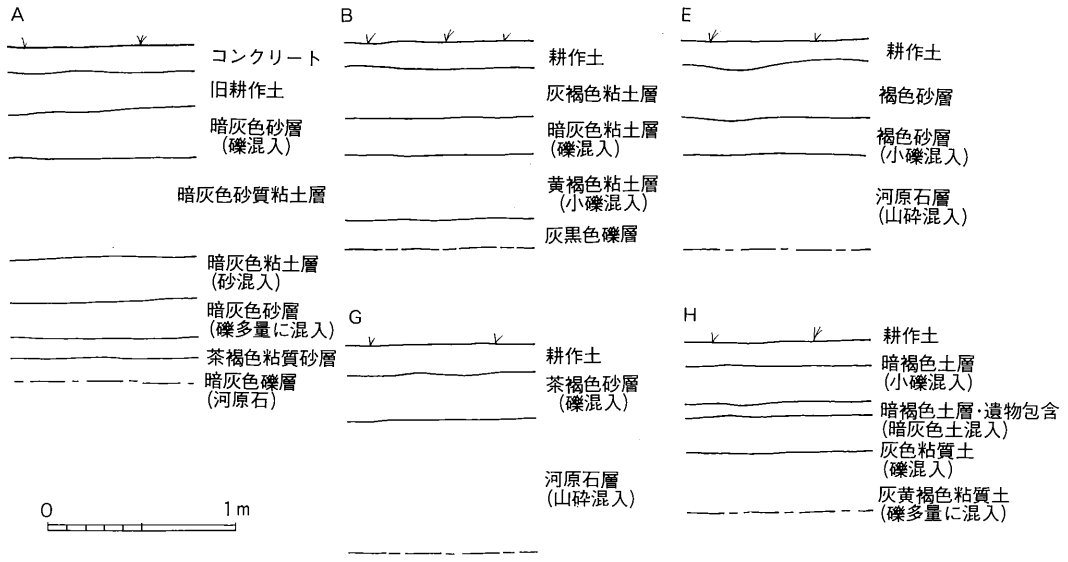
Ｇ地点　最も遺物が表採できる地点である。耕作土下に茶褐色の礫を含んだ砂層が20cmほど堆積し、その下には山砕を含んだ礫層が厚く堆積しており、遺物を包含する土層は検出できなかった。おそらく耕作等により、すでに失われているものと思われる。

Ｈ地点　厚さ約15cmの耕作土下には小礫混りの暗褐色土が20cmほど堆積し、その下に７cmほどの遺物を包含した暗褐色土に灰色土が混った土層が検出された。出土した遺物は、弥生時代後期、箱清水式土器の甕である。１は器高約13cmで、器面は櫛描波状文によって覆われていたものと思われるが、風化が激しくほとんどその痕跡を残していない。２は推定器高27cmほどで、器面を櫛描波状文で覆い、頸部には簾状文を施している。出土状態を見ると共に一括してつぶれた状態で出土したものであり、住居址等の遺構中に存在した可能性が高いが、遺構の検出はできなかった。

八幡地区

計画地内に存在する赤坂、石原Ａ、柳下、峯の各遺跡を中心に44ヶ所の試掘調査坑を設定した。その結果10ヶ所より遺物の検出を見たが、遺構の検出には至らなかった。

１地点　最も西側に設定した調査坑であり、かって構造改善を実施した際に遺物がまとまって出土した地点でもある。耕作土下には、開田時の盛土が50cmほどあって、その下は泥炭に近い黒



第４図　倉科地区土層断面図

色の粘質土が厚く堆積していた。このほか、赤坂遺跡及びその周辺に設定した調査坑では、耕作土下が１地点同様に泥炭層あるいは、動いたとも思える汚れた黄褐色土層となり、遺物の検出はなかった。

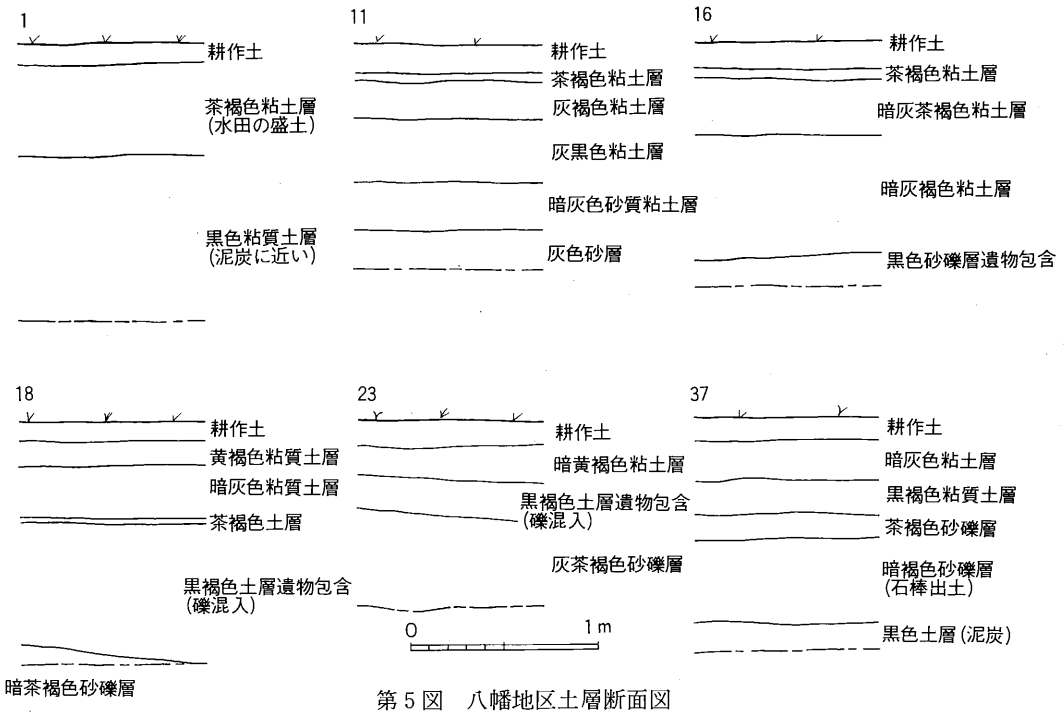
11地点　石原Ａ遺跡の北側に設定した調査坑である。耕作土下は暗灰色粘土層が40cm、泥炭に近い灰黒色粘土層が65cmほど堆積しており、さらに掘り下げると黒色の泥炭層となる。土層が湿地帯の様相を示しており、出土遺物はなかった。

16地点　石原Ａ遺跡の南外に設定した調査坑である。耕作土下には暗灰茶褐色粘土が30cm、暗灰褐色粘土が60cmほど堆積している。その下は黒色の砂礫層となり、遺物を包含している。出土した遺物は、土師器と須恵器があるが小片で図化できない。

18地点　現在は果樹園として利用されているが、かっては水田であったため、上部には水田土壌が観察される。表土下約55cmからは礫を含んだ黒褐色土が65cmほど堆積しており、かなりの遺物を含んでいた。出土した遺物には横瓶と思われる須恵器がある(5)。平行タタキが施されており、上部には把手の痕跡を残している。この他、土師器高坏(4)、平安時代と思われる土師器坏、甕、中世の内耳鍋の破片なども出土している。

23地点　計画地南側の強い北斜面に設定した調査坑である。耕作土下には５cmほどの暗黄褐色土が堆積しており、その下の黒褐色砂層が遺物包含層となる。礫の混入が多く、それに混じって土師器高坏(1)などが僅かに見ることができる。27、28もほぼ同様であった。

37地点　上部に40cmほどの粘土層があり、その下には約60cmの厚さを持つ褐色砂礫層があって、



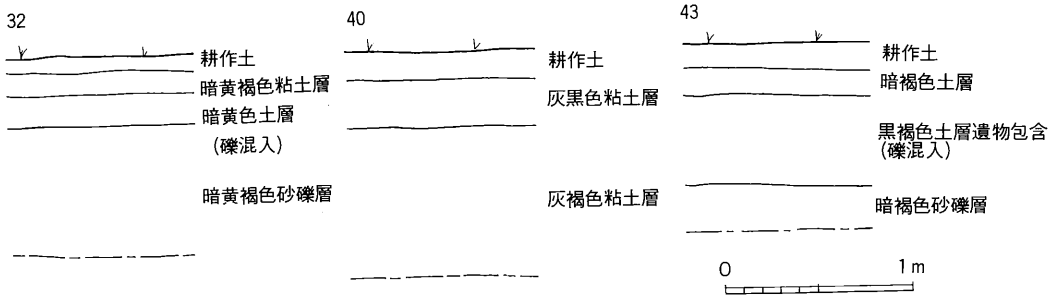
第５図　八幡地区土層断面図

以下泥炭層となる。褐色砂礫層の最下部からは石棒が出土しているが、他に出土遺物はなく、出土状態からみて周辺に遺構が存在するとは考えられない。

32地点　遺跡の存在は確認されていない地点であったが、なだらかな斜面であり可能性の高い地点であった。しかし耕作土の下に僅かな粘土層があるだけでその下は砂礫層となってしまった。

40地点　柳下遺跡として把握されていた地点である。試掘調査の結果、耕作土の下には灰黒色、灰褐色の粘土層が厚く堆積しており、遺物の検出を見ることはなかった。

43地点　峯遺跡とされる地点である。耕作土下には15cmほどの暗褐色土層があり、その下は遺物を包含する礫の混じった黒褐色土層が45cmほど堆積している。出土した遺物はいずれも小片であったが、高坏の脚部(3)などが含まれている。これよりやや西に設定した地点では、遺物の出土は見られなかった。



第６図　八幡地区土層断面図

Ⅵ　まとめ

倉科地区

計画地の中央を東西に走る市道以北では、耕作土下に灰色粘土層あるいは、灰色の砂礫層が厚く堆積しており、三滝川の氾濫原にあたることから、乾季の１月でも90cmほど掘り下げると出水が始まる。したがって、遺跡の存在する可能性は極めて薄いものと思われる。これに対し北側は、すでに南棄水遺跡として確認されているように、広範囲より遺物の出土が見られる。その中でも特に西側に集中し、Ｇ地点を中心に小破片ではあるが、かなりの遺物が採集できる。しかし試掘調査の結果によると、Ｇ・Ｊ地点は耕作土下に茶褐色砂礫層があり、その下は山砕を含んだ河原石層となっていて、遺物を包含する土層が存在しない。おそらく遺物を包含していた土層は洪水耕作等によって削られてしまったものと考えられる。唯一遺物を検出したのはＨ地点である。出土した遺物は弥生時代後期、箱清水式土器の甕であり、２個体に接合できることから、遺構内に存在した可能性が高い遺物である。

試掘調査の実施により、遺跡の範囲は最大限に見て、計画地南西部の東西150m 南北70m 面積8,000㎡ほどに限定された。この内6,000㎡はすでに包含層が存在しない部分と考えられる。作物の関係で詳細な分布は確認できなかったが、開発にあたっては、改めて確認の調査を実施し、包含層が失われている部分についてはトレンチ調査が、残存する部分については発掘調査が必要となろう。

八幡地区

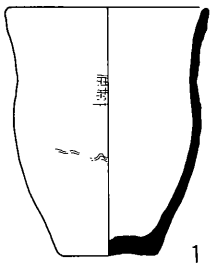
計画地が東西1,200m南北500mと広大であり、また北稲付遺跡、社宮司遺跡の調査でも明らかとなっているように、八幡遺跡群は大遺跡を形成せず、小遺跡の集合として成り立っているため、その遺跡の中心となる部分を試掘調査により明らかにすることは難しい。したがって試掘調査により十分な結果が得られたとは言い難い。赤坂遺跡は構造改善を行った際、かなりの遺物が出土したため、集落址の存在が考えられていた。しかし、試掘調査ではまったく遺物の出土はなく、遺跡の存在は確認できなかった。おそらく遺物が出土した地点は、古窯址のようなごく限られた範囲のものであり、開田時に全壊したものと思われる。柳下遺跡についても同様のことが考えられる。石原A遺跡では周辺に設定した試掘坑から、当初遺跡と考えていた部分より南西にずれることが明らかとなった。しかし各試掘坑より出土する遺物は僅かであり、詳細な試掘調査を実施すれば、さらに遺跡の範囲は限定できるものと思われる。峯遺跡には2ヶ所の試掘坑を設定したが、西側では遺物の出土がなく、遺跡の範囲は狭まるものと思われる。石原A遺跡の南側は遺跡の存在を考えていなかった所であったが、試掘調査により遺物の出土が認められた。遺物の出土も少なく、かなりの傾斜地となるため、どのような性格を持った遺跡であるか明らかではないが、注意が必要である。37地点から出土した石棒は、縄文時代後期の所産と思われるものであり、今回の調査では他に縄文時代の遺物の出土はなかったが、計画地内に同時代の遺跡が存在することが考えられる。

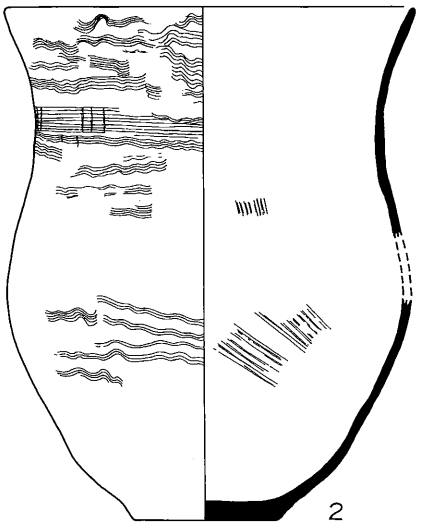
試掘調査の結果、赤坂遺跡、柳下遺跡においては、遺跡が存在しないか、すでに消滅してしまったものと思われ、改めて調査を行う必要はないと考えられる。石原A遺跡については、その範囲がやや南西にずれたものの東西180m南北90mの広がりを持ち、面積は16,000㎡に達する。しかし遺物の出土状態から見て、遺跡が全面に広がっているものとも思えない。したがって遺跡内を縦横断するトレンチを数本入れ、遺構の存在する部分を確認しながら調査を進めることが望ましいと思われる。石原A遺跡南側より検出された仮称白石遺跡は、急傾斜地において検出された遺跡であり、東西100m南北80mの広がりが考えられ、面積は8,000㎡に及ぶものと思われるが、急傾斜地であることから、たとえ遺構が存在したとしても、その半分近くは開田の際にすでに破壊されているものと思われる。したがって石原A遺跡同様にトレンチを入れ、遺構が確認された部分について調査を実施することが必要となろう。峯遺跡についても、東西、南北それぞれ90mの範囲が考えられ、面積は8,000㎡ほどとなる。遺物の出土状態等から見て全面に遺構が存在しているとは考えられないため、上記した2遺跡同様の調査方法が考えられる。

これらの調査結果は、42haと広大な面積の中において100㎡にも満たない試掘調査から得られた結果であり、工事を進める中で、存在を知り得なかった部分から遺跡が発見されることも十分に考えられる。したがってそうした場合にも、対処できるような調査体制、関係機関の連絡をとっておくことが必要であろう。

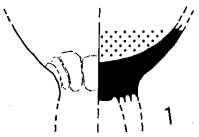
図版 1

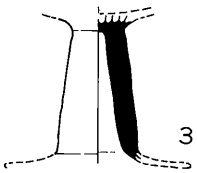
倉科地区

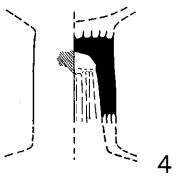


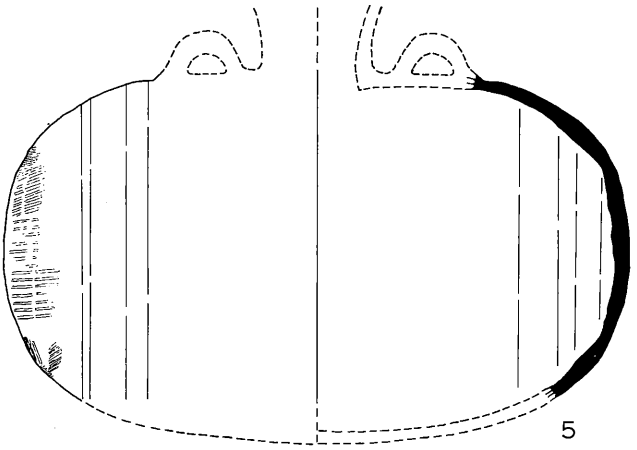


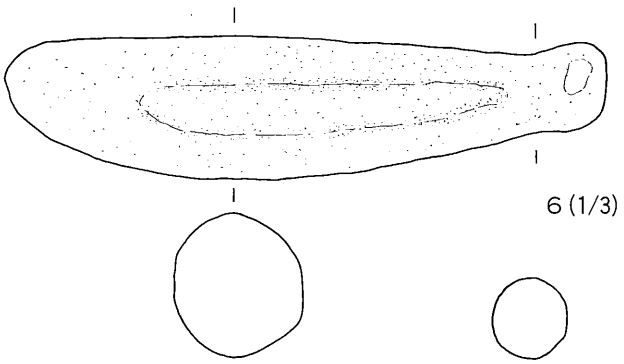
八幡地区











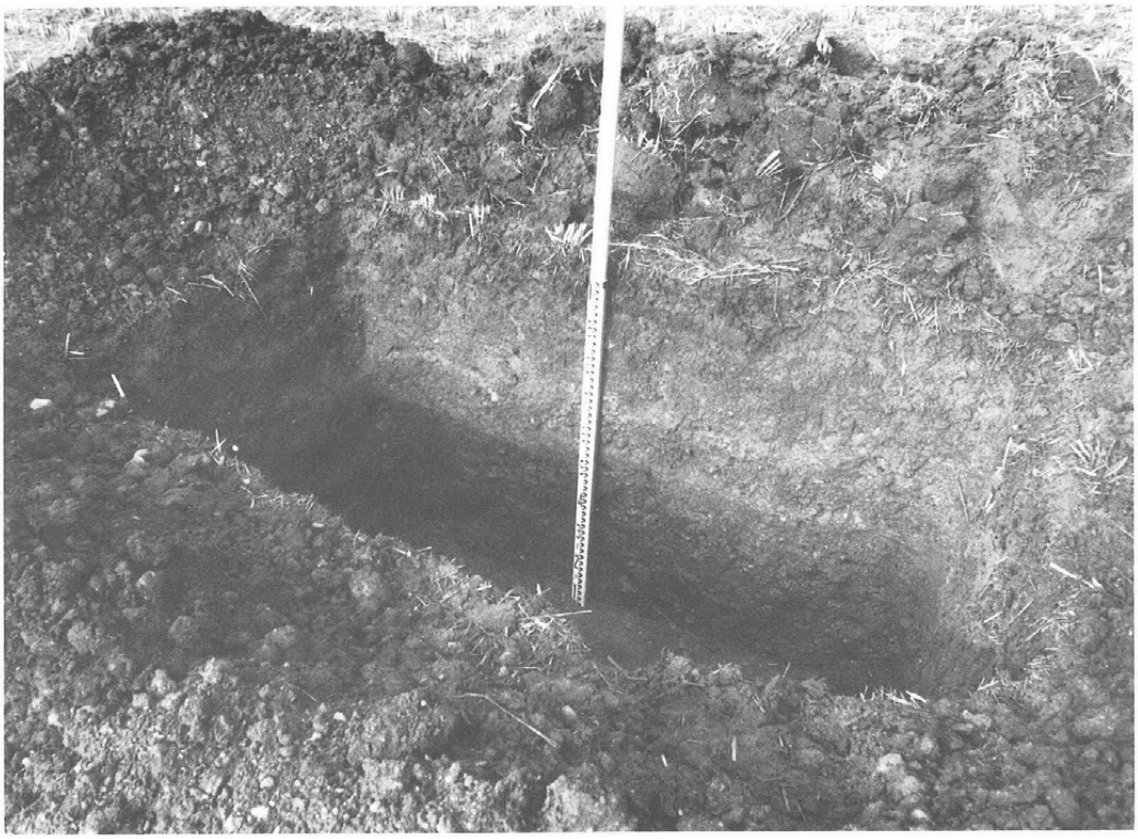
0

図版２

倉科地区調査風景

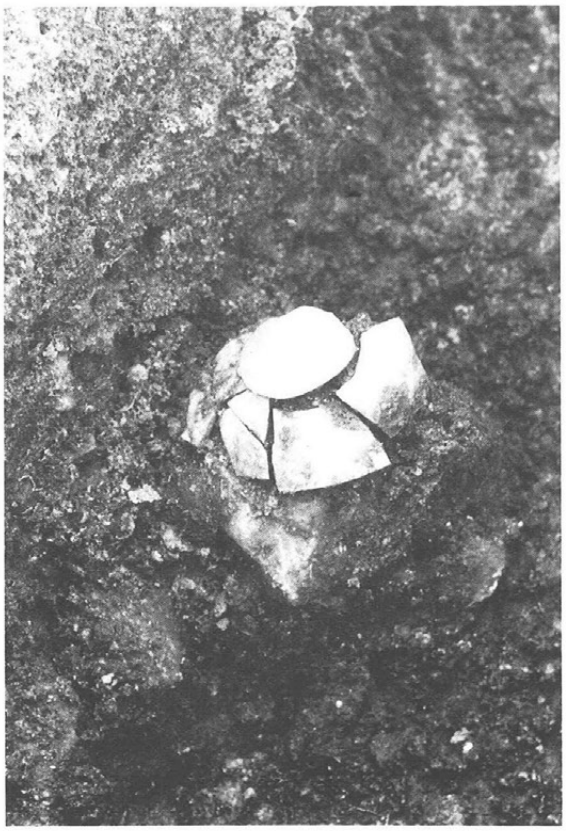
八幡地区遠景

図版３



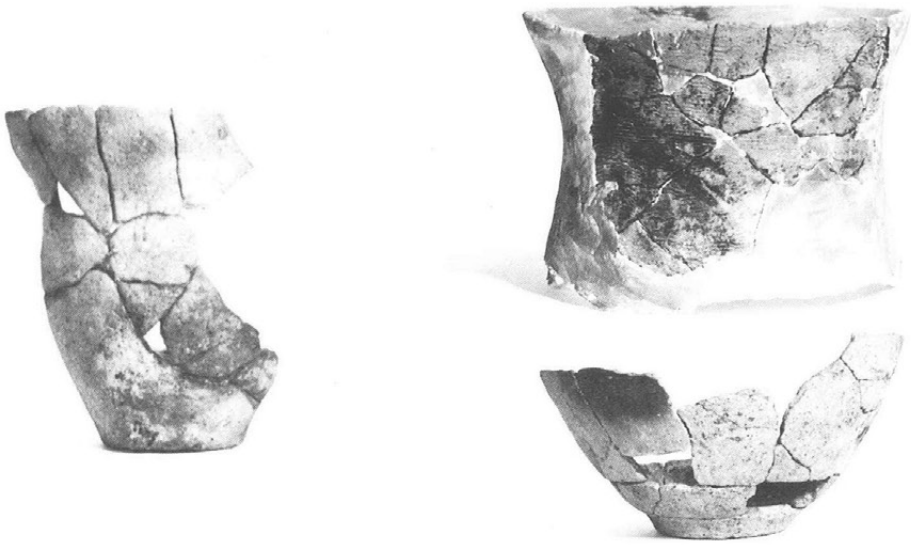
八幡地区トレンチ

倉科地区遺物出土状態(Hトレンチ)

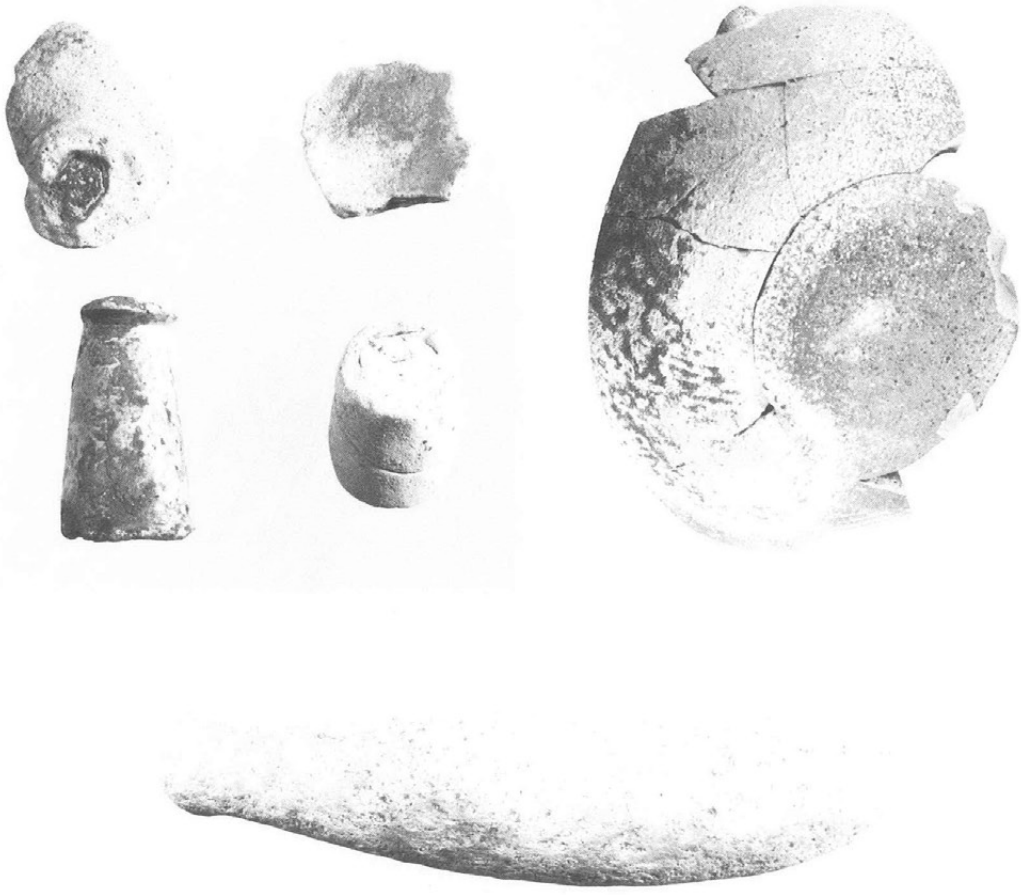


八幡地区遺物出土状態(18トレンチ)

図版４



倉科地区出土遺物



八幡地区出土遺物

倉科地区 八幡地区－工業団地計画地試掘調査報告書

発行日　昭和62年３月31日
編　集　更埴市遺跡調査会
発　行　更埴市教育委員会
〒387　長野県更埴市大字杭瀬下762－2番地
ＴＥＬ（0262）73－2791
印　刷　信毎書籍印刷㈱
〒380　長野市西和田470
ＴＥＬ（0262）43－2105